利益と功徳

こんにちは、斎藤友厳と申します。
本日は「利益」と「功徳」について、お話をさせて頂きます。

「利益」という文字を見せられたら「りえき」と読む人がほとんどだと思いますが、この言葉は「りやく」と読んだ歴史の方がはるかに長いのです。尊敬を表す「御」をつけた「御利益」というとなじみがあるでしょうか。そして「りえき」と「りやく」では、全く意味が違います。

「りえき」は、一般的に言えば「儲け」ですから、損得が絡みますが、「りやく」は、どのような人にも差別なく神仏から与えられるもので、誰も損をしません。
更には、見知らぬ人々の、神仏への善なる好意による受けとる結果を「りやく」と言います。

また「りえき」は予測できますが「りやく」は前もって保証はできません。

よく似たニュアンスの言葉で、自分の行為の結果として降りてきた利益を「功徳」と呼びます。「りえき」と違い、今すぐに見返りがないこともあって、例えばずっと先の子孫の代に効果が表れるとか、そんな意味合いを含んだ使われ方もしています。

相手が神仏ですから、そのお心は計り知ることができません。ですので、たとえばお経を読んだり、布施をした行為の結果が、いつどこに現れるかは不明です。なので、自分に功徳としては降りず、「りやく」として知らない場所の知らない人にまわるかもしれません。

それでも自分はこの善なる行為をする、いや、それだからこそする、と覚悟するのが仏道を歩む人の姿勢だと考えます。

功徳についてのお話を致します。
西暦 500 年頃、前漢の第 7 代皇帝の武帝は、当時最高の教養・文化人で、仏教にも熱心、多くの寄付や支援をしていました。その武帝が、インドからやってきた名高い僧侶で、中国の禅宗の開祖である達磨大師に会って、
「私は寺を造り、経を写し、僧を助けてきた。どういう功徳があるか？」と尋ねると

達磨は一言、『なんの功徳もない』と言い放ちます。

武帝はてっきり、称賛を受けると思っていましたから、「なんだと！どうして功徳がないのか？」と詰め寄ります。

すると達磨大師は、『それら、はこの迷いの世界の中での、ちょっとした因果の報いで、幻のごときもの。実際にありはしない』と諭しました。
これが有名な、達磨の無功徳です。

なるほど、武帝のしたことは立派な行為で、社会的にみると功徳があるでしょうが、
歴史家たちは、武帝のこの度が過ぎた仏教の保護・援助が、財政を悪くし国力衰退の原因になったとも指摘しています。僧侶にとって楽で都合の良いことは、庶民にとってマイナスの、無功徳だったかもしれません。本来の意味が転倒していますね。

たいていの人間は、世間においてまじめに生きていますが、ほとんどの人がそんなに成功はしません。災害や交通事故という、本人には何の責任もないことで苦しまねばならない人たちもいるかと思えば、適当にやって世の中をうまく泳いでいる人もいます。
世間とはどうやらそういうもののようです。

そういう世間においての成功、不成功を考えていた武帝に、

『本当の仏教者であれば世間を超越しなさい。そして今自分にかえってくる成功ではなくて、未来にまでおよぶ功徳や、「りやく」を考えなさい』と、
達磨大師はそんなことを教えたかったのだと思います。

世の中のさまざまな現象を見て、私たちはその直接的な因果律を考えますが、もっと大きく考えたいものです。自分の善の行為は、もし自分にかえってこなくても、誰かの利益になります。それは子孫かもしれないし、全く見ず知らずの他人かもしれません。

そうすれば、「りえき」を忘れた無私の心に、あるときふわりと蝶のように素晴らしい
「りやく」が舞い降りてくるでしょう。